

一九六一年（五一歳）

一月一日

この一年の展望

わたしの一生にとっては、なにか重大な転機と変化が予想される。一種の胸さわぎがする。それはこの四月から医療単価の値上がりが殆ど決定的だからである。経済的不如意がなくなり、わたくしは、金のわずらわしさから解放されそうだからである。医療という仕事が採算のとれる仕事になりそうである。医学の勉強に、医療制度の推進調査に、社会医学をすすめるに、アルコール医学の追究に、すべてに都合がよくなりそうだ。期待の持てる一九六一年だ。

民主化闘争には、医学と医療と文学を通じて可成り意欲的にでられそうだ。

一月二十五日

病院としては珍しく月給この日にでる。

二月一日

静かな一日。大清水回診。金がなくて治療費を払えない患者に、思い切って治療してみる。

二月二日

下高杉に狂人往診にゆき、フォークでおそわれる。

二月五日

病院理事会「米久」にて。金利の負担はまだまだ重い。そのために給与が圧迫されている。これをいかにして解決してゆくか。金利の高いのがあるばかりでない、その絶対額が多いのである。

二月十五日

他人の子供二人に襲いかかった狂人を警察にて鑑定。

三月二十日

医師をもとめて弘大の山本教授のところへ行く。上田教授に言わせると、現在の院長の任務は医師を獲得することにあるとのことである。

四月十二日

人間を愛することは、面倒で困難であるのが、この頃つくづく感ぜられる。

六月二十四日

どこへ行っても、人間を好きになれないのが悲しい。一体俺は誰を愛しているのだろうか。妻を含めて、誰をも愛していないのではなかろうか。それなら自分を愛しているのだろうか。それすら、はっきりしないのではなかろうか。

九月十九日

入院加療中の〇〇さんという患者の夫がやってきて離婚を宣し、妻の泣きわめく、わが病室。われそれに無力であった。どうすればいいのか。

十一月十日

電気睡眠療法開始。

十一月三十日

電気睡眠のことで新聞発表をする。

十二月十六日

大学精神科の忘年会、日景温泉にて。教授の権力主義的横暴目にあまる。健生病院をつぶしてみせるとまでの暴言であった。大学病院の任務を充分承知している筈の私が患者の少ない大学病院精神科に患者を送ってやらないからというのがその理由であるらしい。馬鹿もおけである。

十二月二十八日

この年は覚に帰ってもいい、帰ってもみたいと思っていたのに、その機会はどうとうなかった。

人間を、患者を愛することの困難は、どんなに面倒なものであったか。

妻に対し、母に対して、もっと心を労すべきでなかったろうか。

もっと時間がほしい。外来診療して病室の診察であり、全くたまったものではない。だから患者に対して結局粗末になる。私のみななければならない外来患者は四〇～五〇、入院患者四〇人。これを一人でやれというのは無理な相談であった。

病院としては赤字経営から脱却できた、肩の重荷のおりた年であった。

一九六二年（五二歳）

一月一日

この一年の気持ち

政治的に思想的にしっかりと物を考え行動してゆきたい。人間をつくりあげてゆきたい。愛すべきものを愛し、にくむべきものを憎んでゆくような。

三月十日

黒石母の会で地元の新聞にアルコール追放の集会として報道したのだから大へん、アルコール追放なんでもってのほか、それこそ家庭を破壊するものであるとして酒をおおった二人の男子が入ってきて敵意ある質問と発言をされて困った。しかし結局は納得して貰った。それで効果があがった。

三月十二日

“酒の害から家庭を守る
手をつなぐ妻の会
をつくるに至った経過”

一九五九（昭和三十四）年は世界精神衛生年であり、私たち精神科の医師は国民の中に入ってゆき、精神衛生の運動を展開することになり、私もその肚をきめた。私は託児所や幼稚園の保母たち、小学校の先生たち、PTAの会に呼ばれてゆき、精神衛生の講話をした。一年に約二十回からの講演もしたろうか。講演のあと私を訪ねてくる人の一番多かったのは、アルコール中毒や酒くせの悪い人の妻や母であった。

私は講演の中でアルコール中毒や病的酩酊についても話したからであった。抗酒剤のノックピンを上手にのませることによって、夫や父の酒の上での悪い癖がなおってゆくと話したのであった。

夫の害に悩んでいる妻が意外に多いということ、夫の酒害からの妻の悩みの意外に深刻であり一秒を争うものであるということが、私の胸を重くした。

精神科の診療をしているうちに農村婦人の心臓神経症を沢山治療するようになった。農村婦人の心臓神経症の可なりなのが、夫の酒くせの悪さに起因しているのを知って、びっくりした。酒くせの悪い夫が酔っぱらって帰ってきて、がらっと手荒に手をあげる。その度に妻や子供は心臓をどきっとさせる。病的酩酊の夫はどなり、叫び妻をなぐり火箸や茶碗を投げつける。その度に妻の心はおどろき、妻の心臓はたた、たたっと打つ。これを繰り返しているうちに妻は心臓神経症になってゆく。酒の害について私は深く考え込むことが多くなった。

非行少年、問題児の相談をうけているうちに非行の原因として父の酒くせの悪さを考えないわけに行かなくなった。学用品を買ってくれない父が、自分で飲む酒のためには母をたたいても母から金をせびり出してゆく。学校で教わった正義や人間性は、父の酒くせの悪さからの乱暴狼藉から破壊されてしまう。アルコール中毒や病的飲酒の家の子は不良児となってゆく、それを知って私の胸はいたんだ。

こうした母と子の後ろだてになってみたいと念じて私はそうした父や夫に、父や夫の了解を得た上で、了解を得られなかった場合は了解を得られないままに、ノックピンという抗酒剤をのませるように妻の手に渡してやった。妻を激励してやった。元気を出して夫にノックピンをのませるように頑張らせた。

そしたらノックピンをのませた夫や父のうち三分の一は酒の上での事故や面倒をおこさなくなり、妻や母や家人から感謝されるようになった。一つの講話をすると二人位の平均で妻や母が酒のことで私を訪ね来ているうちに、酒の害から家庭を守るという私

の決意はかたくなって行った。酒の害から家庭を守ることに成功した例がふえるに従って私のたのしみも大きくなって行った。

しかし夫の酒害に悩む妻や母の姿をみていると心がいたんだ。夫にかくれてノックピンを貫いてくる。姑に内緒で私の診察室にやってくる妻や母は、ひとり淋しく、顔をうち伏していた。悪いことを、してはならないことをしている、それが彼女たちの姿であった。彼女たちはびくびくしながら私のところに通っていたのであった。

そして昨年一九六〇年の夏、私はソ連に一ヵ月旅した。ソ連の共産党大会で酒の害から社会と家庭を守るために国をあげて討議しているのを知らされ、ソ連での酒の飲み方を見て、私の目は開かれた。私は胸を打って日本に帰ってきた。アルコールから家庭を守るのは、一人の医師、一人の精神科の医師のものでない。これは社会の問題であり、社会全体で考え、社会全体で対策をたてねばならない、これが私の胸の中に咲いた花であった。

五月十八日

人を思うことしきりである。すべての人にどこかいいところがある。それをさがしあててみたい。

信頼された患者に死なれる。わが技術を考えてみる。わが信念の足りなさに思っていたる。

九月二十九日

私は医学と文学の面で生活したかったのであり、政治活動の一線に出てゆくのは、冬の雲のように私の心の中で重かった。と言って共産党に帰ったときもいまも、党が要求するのであれば何でもやるとの気持ちはたしかであったが、これから再びの政治活動は心の重荷であった。

十月十二日

昨夜入院の急性緊張病の患者死亡する。人の生命にとってこんな絶対危険物がまだいるのである。

十二月七日

母が林檎四〇箱を持って本郷の妹と来る。宮本さんに頼んで母の声を録音し、母を八ミリにおさめる。録音のなかで母はなかなか雄弁である。母が録音のなかで私について語ったことには、母としての情熱と詩があつて面白かったが、そのころの私の悩みは母に共感されてなかったことが特長的であった。

(一九六三年分の日記帳は紛失。同年四月十七日、津川先生は青森県議会議員選挙で初当選を果たす)